

仕とくなアれ、イ、エ容色好みをしますかいな、どんな不^へ容^ち色^やでも大事おまへん、なんぼ別嬪でもツンとして依る女は嫌いだす、友達が言ひますがな、なんやお前とこの嬢、ツンと仕てるなア、えらばつてるのんかやなんて、それより、不^へ容^ち色^やでも愛想の宜い、愛敬の有る嬢が欲しいのんだんね、イヤウ、仰山子供が寄つて来よつたで、ナニ氣狂やて、阿呆言へ、氣狂やないわい、おまへ等子供で解れへん、天神さんに嬢を頼んで居るね、そつちへ行き、ナア天神さん、私が晝でもコロツと寝てます、其所へ友達が出て来ますと、嬢がマア兄いさんお越しやす、毎度宅の人が御厄介になりました、まして、何うぞお這入り、イエ、今あんまり辛度いと云ふて、奥で横になりましたのん、もうし、お友達が見得ました、どうぞお上り、友達と私と話をしてる、オイ友達が来たのに一杯出しんか、と私に言はず様な事では駄目、言はひでもチャンと酒肴の用意して、兄いさん何も御馳走がおまへんが、一口如何だす、イエ甚い失禮だすが貴郎に拵へたと言ふ譯やおまへんね、いま、宅の人があんまり退屈したので、一杯飲もかと言ふて居たとこ、誰ぞお連が有たら宜いのにと思ふてました、宜い處へ來とくなアつた、附合ふとくなはれ、酒はすれせんもん、チョツと酌がして貰ひますは、御免やすや、さよか妾も、一つ戴きますさ、甚い久敷振りで酔ひました、兄いさん何ぞ一つ、聞かしくくなあれ、三味線を持つて來て、チャンチャンチャン、はなアの……アウ痛い、コラ、無茶をすな、頭へ石を當て依つた、ナニ、色氣狂や、阿呆言へ、コラ此所はいかん、裏手へ廻ろ」

社の裏へ参りますと崖になつて一面に熊笹が生へ稠つて居ります、其横に、紺のモジリを着て、汚れた手拭で頬冠りを仕た男が繩を前に置いて、土手の穴を見つめて居ります、處へ、右の男が

「薩張りワヤや、色氣狂や言ふて、石を當て依る、お嬢の、お世話は、ないかない……ア、モン、あんた、其處で何を仕てなアるね」

「コレ、其方へ行き、貰しゆう言ひな」

「あんた、何を仕てなアるね」

「貰しゆう言ひなと言ふのに、狐を取つてるね」

「ア、左様うか、狐を取つて居なアるのんか、これは宜い處へ來た、見せて貰を」

「コレ、大きな聲を出すな、其方へ行け」

「別に見る位い見ても大事おまへんやろう」

「そら見るのは構わんが、大きな聲を出すなと言ふのんや」

「大きな聲は、私の地聲や」

「大きい聲やな、黙つて、呉れ、イヤ此奴の穴やない、餌を拾ひに出て來たのや、晝は今日つさんのお照らしで目が見へぬ、私に見附けられて、狼狽此穴へ逃げ込んだんや、出て來る處を掘へる積りや、畜生でも人間の言葉を悟る、大きな聲を出すと出て來ぬ依つてに、暫くの間、黙つて居て呉れ